

建設の碑

高梁川東西用水工事竣工記念碑

土木事業の宿命

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

千 人塚を訪れた翌早朝、JR倉敷駅の北西約二キロにある酒津公園に向かって歩きはじめた。そこには高梁川改修工事の附帯事業として建設された国内最大級の農業用配水樋門「酒津樋門」があるからだ。

そもそも高梁川の流域一帯は、流下土砂と干拓によって造られた氾濫原だった。『備中誌』を見ると「此地はもと海中にて、今の妙見山なども一つの小島で、山添いに漁民や船人が住んでいて…」とあり、この妙見山とは今では多くの観光客が訪れる倉敷美観地区の鎮守の丘だといえ、当時の事情が察せられる。

千人塚の犠牲者をだした明治十七（一八八四）年の台風の後、高梁川流域の住民から高梁川改修工事の陳情請願が巻き起こった。この最中、折あしく明治二十五年と二十六年に連続した水害が一帯を襲い、特に後者は犠牲者四二三人、家屋全半壊一二、九二〇戸という甚大な被害をもたらした。行政が後手後手に回るのは、今も昔も変わらないように、事が起こらなければ腰はあがらない。幸か不幸か、これらの連年水害によって、高梁川の改修計画は動きだし、明治四十年に着工を迎えた。

当時の高梁川は、酒津樋門の少し上流にあたる

古地という場所で、丘陵に阻まれて東と西の二川に分流していたが、明治時代の改修は、一川主義を至上としたので、一つにまとめられることとなった。すなわち、古地の分流地点から東側の河道を採用して丘陵をやりすじし、酒津で新水路を開削して再び流れを西側の河道に戻して拡幅整備するとともに、川岸を延長二〇キロ以上に及ぶ堤防で固めた。こうして酒津より下流の東側河道は廃川となり、跡地を利用して水島臨海工業地帯が形成された。

これが高梁川改修工事の概要だが、もう一つ複雑な利水問題も解決しなければならなかった。改修前の高梁川下流には一二の農業用水があり、それぞれが異なった取水口を設けていたが、これらを酒津で一つに合わせ一括配水を行う方針が取られた。取水堰は酒津地先に建設され、東側の河道の締め切りと酒津配水池へ水を送り込む役割を担った。酒津配水池には南側一五連ゲート、北側六連ゲートの配水樋門が設けられ、大正十五（一九二六）年に一連の工事が完成し、それぞれの用水路へ水が供給された。現在の酒津配水池は、花見や水遊びの場として親しまれている。特に国内最大級の南樋門は造形も美しく、高梁川改修工事を象徴する存在となった。

しかし、この改修工事の目的は利水ではなく、あ

くまでも治水にあり、酒津樋門は附帯事業の一構造物に過ぎない。竣工後、高梁川流域では大規模な洪水は起きていないにもかかわらず、後世の私たちは特別意識することも、過去の事業を顧みることもない。人の目は美しい枝葉と樹木に向きがちで、森の全容と効用を把握し、理解するにはなかなか至らないのだ。酒津樋門と高梁川改修工事は、こうした土木事業の宿命をよく表していた。



高梁川東西用水工事竣工記念碑

〔交通〕JR倉敷駅から徒歩30分

※碑文の全文は日建連HPに掲載しています。